藝苑

特輯

詩と短歌

geie 7

藝苑
昭和九年六月十八日第三種郵便物認可
昭和二十一年七月二十五日印刷納本昭和二十一年八月一日發行
（毎月一回一日發行）
第二卷 第六號

吉田精一著
日本近代詩鑑賞
—藤村より白秋まで—
定價十二圓
送料一・五〇
發賣中

日本近代詩は泰西文藝思潮にふれて誕生し、うつくしい曙のやうに青春の時代を彩つた。清新な思潮、近代の悲哀と煩悶とは、近代詩に於て、最もあざやかに表現されてゐる。長いねむりから覺めたうら若い魂は憧憬と光明と空想に醉つたやうに、民族の詞の華を開いたのである。

この書は一流詩人の代表作をえらんで、精緻な研究をし、心にくいばかり周到な鑑賞を試みてゐる。時として難解な近代詩もこゝに正しく享受される。さうしてまた近代の激しい情熱とれるてあらう。若さの生命とは全篇に溢れて、近代文學精神とは如何なるものかを最も直接に語るてあらう。

日本近代詩鑑賞續篇
—白秋より春夫まで—
價十二圓
〒一・五〇
八月下旬

東京・神田・神保町・三の二
直接註文受付中
天明社

板垣直子著
漱石・鷗外・藤村

日本の知性文學を代表し、而も世界的水準を示すこの三人、漱石の一途な發展、鷗外の比類なき明晳、藤村の血みどろな苦惱、かれらの蒼茫巍然たる大文章と人間性の内奥に深く探り當てたものは何てあるか。本書は、いまや吾々の文學の昏迷の中に一筋の强烈な光を投じた。漱石、鷗外、藤村の順に、獨自の方法論を以て熾烈なる論究の筆を進め、終りに三人の比較考察より更に將來の文學への展望期待を綴り大きく結んてゐる。

内容
▽漱石篇
▽鷗外篇
▽藤村篇
▽比較考察篇

當に男子を瞠若たらしめる女史畢生の業績てあり、不日、その眞價を謳れるてあらうことは必然てある。敢て讀書子の御一讀を薦める次第てある。

B6判上製四六四頁
價三五・〇〇 〒一・五〇

應直接御註文
巖松堂書店

㊟定價金五圓（送料十五錢）

現代詩の諸問題

北園克衛

美しい風景やある種の感動的な思想に接した時、ひとびとは屢々「詩的」と言ふ言葉を以つて、その氣分や感激を形容する。かういふ場合に使はれてゐる形容詞としての「詩的」といふ言葉は、實際に詩人が詩にしようとしたり、これは詩になると考へる場面を適確に示してゐる場合もあるが、さうでない場合も相當に多いやうである。この原因はなかなか複雜であつて、簡單に言ふことが出來ない。しかし、とにかく一應「詩的」といふ言葉が正しく使用されてゐるとして、さういふ對象を詩によつて表現する場合に、どんな方法が用ひられるかといふことは、興味のあることかも知れない。ひとびとは、「詩的」な風景や思想を、多くの場合、そのままに書きつけ、描寫して、それで一應滿足する。しかし第三者がそれを讀むと、一向にその作者が表現したと信じてゐるところのものが表現されてゐない場合が多いのである。そこでひとびとは、これは技巧がまづいからであらう、といふ程度であきらめる。勿論詩に限らず、あらゆる藝術は技巧なしには存在しない。しかし技巧は、單に言葉をよりよく用ひるといふ意味に限定してしまつてはいけない。これについては繪のことを考へてみるのがよい。繪は畫布を整備したり、繪の具を油で溶いたり、刷毛でそれをどんな順序で塗り、どんな仕

上げをするか、といふことも技巧と言つてゐる。つまり畫布を整備するといふことは、單に畫布を枠に張りつけるだけではなく、畫布にホワイトなどを塗り、あらかじめ繪を描く準備をするが、そのホワイトの塗り方や、繪の具を油で溶くのにテレピンやリンシイドやその他の油を用ひるが、それの選びかた、それからその繪の具と油の混合の度合、また刷毛の選び方、粗い毛を用ひるか、軟らかな毛のものを選ぶか、丸い筆を用ひるか、平なのを用ひるか、さて描き上げた畫面にどんな液體を用ひて固定し、艶を出すか、あるひは艶を消すか。これらのことを技巧(メチエ)と言つてゐる。それは風景や靜物や人體の描きかた、どんな構圖で、どんな色調で、どんな形式で、描くかといふ技巧(テクニツク)とは區別されて考へられてゐる。またさういふ區別をすることが必要になつて來る。これが繪の專門家の場合である。所謂アマチユアは、キヤンバスと刷毛と繪具と溶き油を買つてきて、いきなり描きはじめる。だがどうもうまくいかない。これは技巧がまづいからであらう。といふ程度でがまんする。

詩の場合に於ても、これとほぼ同樣のことが言へるのであつて、メチエに屬する部分について言ふならば、言葉の選びかた、一行の長さの度合、節の行數、句讀點、さういふものについて、あらかじめ統一した思索と研究をすませ、その用ひ方をきめて置くことが、繪の場合のメチエの部分に相當するわけである。專門家の詩が統一した落ちつきと、正確さと、獨自性を持つてゐるのは、さういふ詩作上の基本的な思索と研究が充分になされてゐるからである。だがメチエはあくまでメチエに過ぎないのであつて、それのみで作品を書くことが出來ないのは言ふまでもない。繪に構圖や色調や形式があるやうに、詩にも構想や語調や形式があるのはひとびとが既に知つてゐる通りであつて、美しい風景、感動的な思想を表現するためには、それの中心となつてゐるところのものを正確に把え、これをどれだけの行と節によつて、どんな語調で表現するのが效果的であるかを考慮する。またそれを寫實的に書くか比喩的に書くかについて考へる。この考へは、書かうとする事柄に對する嚴しい觀察となり、それへの分析となつて活動しはじめる。その不必要な部分を區別し、中心を發見し、それを支へてゐるものの性質や價値や理由を充分に理解するとき、はじめてそれらを再び詩の形態のなかに組み立てることが出來るのである。多くのひとびとは、このかなり複雜な操作のあることを知らない。にもかかはらずある程度の良き詩を書くことが出來る場合があるのは、他の詩人の

以上のやうな研究や發見をそつくり利用する場合である。亞流と呼ばれてゐる詩人の多くはさういふ他人の研究をそのまま利用して詩を書いてゐるわけであるが、結極、他人の研究を利用してゐる限りその研究者以上に出ることが絶對に出來ないわけである。しかし多くの詩人もまた最初は何人かの研究に暗示を得、あるひはそれを利用しつつ自らの道を發見した詩人であるから、他人の研究を利用することを必ずしも回避する必要はない。

詩のメチエと詩のテクニツクに就ては大體明瞭になつたことと思ふが、詩がそれだけで書けると考へることは充分ではない。何故なら、詩は自然、人生、生活等々に對する美的判斷による文學的表現の一樣式であるからである。この世界觀、人生觀、文學觀の相違は必然的に詩の形式を相違させる。またそれは當然テクニツクに作用する。詩に於けるいろんな傾向、流派はさうした詩に裏付けられた思想の特徴を示してゐるわけである。

「詩的」といふ言葉の内容もまた、この思想の判斷の網を免れることは出來ない。あるひとにとつては素晴じく詩的と思はれることも他のひとにとつては平凡なものである場合があるわけである。

最近所謂長詩や叙事詩が書かれなくなつてしまつた理由は、いくつかある。だがこれに依つて、さうした詩のジアンル(樣式)が全く消滅してしまつたとは言へない。然しさうした事柄、フオルムやジアンルの變遷には必ず特に指摘されるやうな重要な理由がある。長詩や叙事詩の場合は、小説、物語といふやうな近代文學を特色づける一樣式の壓倒的な發達を考へれば充分であらう。散文作家は詩の傳統や形式に少しも煩らはされることなしに、そのストオリイをあらゆる角度から徹底的に書くことが出來る。かういふことは長詩や叙事詩の最も重要な部分が、散文作家の手に移つたことを意味するものである。詩人は潔く、散文作家にその仕事をまかせればよい。然しながら、詩人と散文作家との關係は單にジアンルの相違といふだけの簡單なものではない。このことは文學史のなかに判然と記錄されてゐるところであつて、あらゆる時代の新しい傾向、流派は、詩の火口から小説へと流れてゐる。特に近代文學のすべての新しい運動は、詩の協力なしに行はれたものは皆無と言つてよいのである。それは文學に限らず、音樂、演劇、繪畫、彫刻、寫眞、建築等あらゆる藝術のジアンルに亘つて、詩が主動的な役割を果して來たことを知ることが出來るであらう。これは詩が新しい思想法の發見や創造の表現に適してゐるからである。

最も著しい、また最近の一つの例として、シユウルレアリズムが小説に與へた影響としてジエイムズ・ジョイスの「ユリシイズ」に彼が用ひたオオトマチズム(自動記述主義)の手法を想ひ出すことが出來る。意識の流れに沿つてするこの表現法は、小説の世界に極光のやうな超現實的の光りを投げかけたのである。確かにジョイスのやうに、詩の高度な理念を直接に取り入れるだけの高い文學意識を持つた作家は稀れである。だが、より低い、より通俗的な部分に於ては、たえず小説家達は詩人の發見を利用し、自らの作品のなかに新しい感覺を取りいれることに注意し、また努力して來たことは、文學史上屢々明らかに書かれて居る通りである。これは、詩人が、その生れながらの敏感さと、何ものにも執はれない純粋な思考によつて、何人よりも遙かに高く、時代の推移を凝視してゐるからである。今日、世界の樂園とも言ふべき、あの豐かなアメリカに於てさへ、詩人の生活は決して豐かではない。詩人はその生れながらの潔(いさぎ)よさの故に、如何なる國、いかなる社會に於ても、その鬪爭と術數から身を引いて、その汚濁の日日を拒絶しつづけ居るからである。そこに詩人の蒼白の運命があり、不可避的な反逆の原理がある。そしてそこに純粋な人間としての詩人の良心があるのである。

ひとびとは、詩人の僞りなき言葉や行動をしばしば「甘い」といふ感情を以つて批評したり、また揶揄したりする。しかし深刻なものが往々にして卑俗な偏見にさへ過ぎないことに氣付かないのである。また「甘さ」は一種の純潔さ、何ものにも執はれない斬新さの姿である。われわれがギリシヤの哲人たちの言葉を讀みかへす時、思はず微笑せずには居られない單純さ、甘さは、彼らの哲學が永遠に朽ちることのない人間の思考の原質的なものに通つてゐるからである。ボオドレエルの深刻さは、この偉大な詩人の一つの弱點である。そこには時代に對する必要以上の傾倒がある。これに反してマラルメの無關心と戯れの精神が、彼の作品に永遠の明るさと、新鮮さを與へてゐることにひとびとは氣付くに違ひない。しかしながら、かうした專門的な判斷を超えて、ひとびとは磨かれた一枚の鏡のやうに、詩に向ふのがよい。詩がひとびとの苦痛や懊惱を輕くも重くもしないと言ふ理由のもとに詩を非難してはいけない。また詩がひとびとの幸福や愉樂に加擔しないと言つて非難してはいけない。詩は作者の心の狀態を調整する、あるひはそれに均衡を與へる欲求によつて書かれるものであるからである。勿論このことは作者の文學觀、人生觀、世界觀が基調

となつてゐるのであつて、そのことが必然的に普遍性を含んでゐることもまた事實である。一つの文化財としての詩の在り方について言ふならば以上の如きものである。即ち詩はひとびとの享樂のために存在してゐないと同樣に教訓として存在してゐるわけでもない。詩の純粹性といふものは、さういふ功利的な必要、不必要から獨立して存在してゐる點にあると言ふことを知るべきであらう。これは詩に限らず、藝術のあらゆるジアンルに於て同じことが言へるわけである。しかし乍ら、このことは詩に無味乾燥なものが良いとか、無感動なものが正統であるとか言ふ意味ではない。ただ一つ詩がすべての人々に滿足を與へるやうな場合が無いと言ふことをここでは言つてゐるのである。あるいは人にとつては素晴しい詩が、他の人には左程でもない、全然つまらないと言ふ場合があつても決して不思議ではないと言ふことである。從つてひとびとは自分の趣味や趣好や理想と一致するやうな詩を探すべきである。そしてそれは必ず發見されるに違ひない。ただすべての人々がさうであるやうに、詩人の教養や趣味にも高低があり貧富貴賤がある。詩についての嗜好が年齢や教養の生長に沿つて變化し洗煉されてゆくこともまた否みがたい事實である。

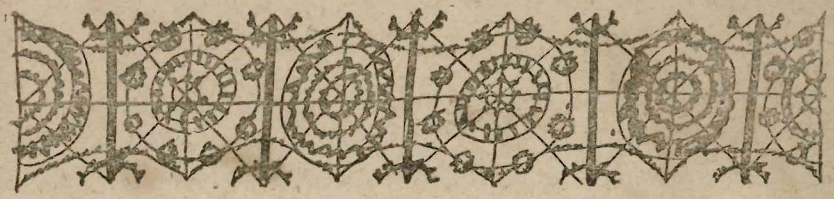
今日の詩、即ち現代詩は過去の詩が美しい風景や神への讃美や個人の感情を表現する技術の美しさ、巧妙さ、に集中されてゐて、詩人の個性や素質が、技術の裏に隱れてしまつてゐたのである。そのために良い詩とは技術がうまい詩と言ふことでさへあつた。然るに現代に於ては、作者の個性と素質が重要になり、次いでその世界觀や藝術觀が詩の價値を左右するやうになつて來た。したがつて文字の用ひかたや表現の仕方が如何に巧みであつても、その詩の內容が貧しいならば、その詩は決して良くもなく問題にもならないやうになつて來た。殊に自由詩の形を持つてゐる新しい詩に於ては最早技術といふものが詩の內容から獨立して存在し得なくなつてしまつた。韻律といふやうな統一した約束が必要でなくなつたからである。と同時に小手先で言葉を弄ぶやうな職人的なごまかしが全く役に立たなくなり、作者の人間としての全體的な價値が直接にその作品に反映するやうになつた。これは詩の大きな進歩である。その結果として、作者の世界觀、藝術上の態度が直ちに詩の形や內容となつて示されてゐる。このことが、昔の詩と違つて一般のひとびととの結びつきをうまくゆかなくしてゐるやうである。つまり詩の水準が高くなり、專門的になつてきた。しかるに大部分の人々はさうした詩の進歩についてゆけないのである。このために水準の低い、つまらない

詩人が却つて一般から賞讃され、もてはやされるといふやうな結果を生んでゐはしないであらうか。しかし仕方もないことである。何故なら、すべてのひとびとが詩に最高の認識を持つことは有り得ないことであるからである。

しかし、何等かの方法によつて、ひとびとが最高の水準にある詩に絕えず觸れることに努力するならば、やがてはその詩の高い價値を理解することが出來るやうになるであらう。

歐洲と東亞に相つづいて起つた五年間の激烈な戰爭は、世界の文化を果てしなき混亂と破壞に導いた。若しこの現實に直面しつつ、少しの動搖も感じない者があるとしたら、それは多分神か惡魔であらう。かういふ悲劇的な時代に於ては、すべてが極端に表はれてくるのである。詩もまた、この原則をまぬがれることは出來ないであらう。すでにフランスに起つたドロリズムもその一つである。この絕望的で病的な流派が將來どのやうに發展するかを豫測することは出來ないが、現實に對する絕望が深ければ深い程、その詩が陰慘な姿となつて現はれて來るのは致し方のないことである。文明への不信と絕望と憤怒。數百年、數千年に亘る人類の努力を以つてしても、いまだにこの原始的な、野蠻な、戰爭から脫しきれない人間の運命について、われわれはもつと深刻に、嚴しく考へなければいけない。この飢ゑと、無秩序に奔弄され乍ら、われわれがただ「仕方がない」といふ無批判な態度を以つて虫のやうに無感覺に、この苦難の時を過ぎてしまふならば、われわれは遂に救ひ難い無智な運命の奴隸としての將來があるばかりである。

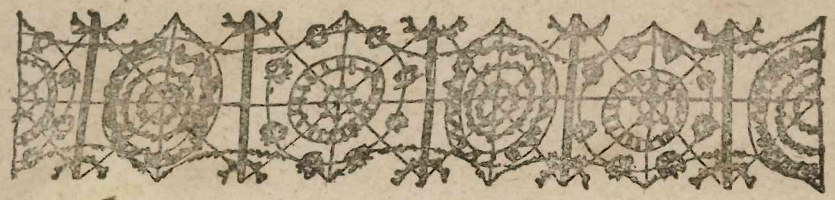
敗戰以來今日まで、新聞、雜誌、ラジオに現はれた詩について考へるに、殆んど大部分の詩が現實より游離した、風物詩や抒情詩にみちてゐるのは何を意味するものであらうか。しかも詩人達の研究機關誌として發行されてゐるものにこの傾向の强いといふことは驚くべき無感覺さであると言ふべきであらう。若い詩人達は、現實に對して、眼を覆つてはならない。より嚴しく苦しみ、怒り、絕望すべきである。自分は占領軍が進駐軍であつたり、無條件降伏が終戰であつたりする、圖々しい、みえ透いた、氣取りを嫌惡する。そしてこのやうな運命に對する不遜な態度が、日本人を永遠に墮落させ、人間的率直さから引離してしまふことを怖れる。詩人は卒先してこのことを詩に依つて示すべきであつた。にもかゝはらず詩人の多くはそれとは全く反對に、その氣取りを利用して、自らのちひさな文學趣味のなかに韜晦してゐるに過ぎないのである。かくの如き一群からは決して新しい詩人も、將來の詩を培ふ新しい詩精神も生れては來ないであらう。



この頃

田中克巳

二十日間の集團生活と
六日間の航海のあと
私たちは無事にニッポンに着いた
二時間あるいて宿舍に着くと
出迎への人が演說した
はじめに皆様ご苦勞さまでした
あとは何を云つたか覺えてもゐないが
御苦勞さまを云はれたとき



斜め前にゐた女の子の頰に
涙がスーッと流れるのを見たことだけが
いまも忘れられない印象だつた
そばかすのある女の子だつたが
一番若くてよく働いた子だつた
さて僕もこの頃つくづく思ふ
辛いことの數々はいくらでも耐へやうが
何か泣けるやうな美しいことばが聞きたい
僕は男だし年よりでもあるし
辛くては泣けないので非常に困るのです
ニッポンのお嬢さん方　たとへ嘘でもようございます
やさしいことばで男を泣かして下さいね

編輯室より

先づ以て暑中の御見舞を申上げる。何時も健在で何よりだ。自分も暑氣にも負けず、元氣で編輯に專念してゐる。度々、雜誌に對する批判や忠告、又現在女性の教養や思想等の問題について便りを受けながら、何時も滿足な返信や解答の與へることの出來ないのを申譯なく思つてゐる。これがそちらに屆く頃は、あの悲しい八月十五日が、一年の時を經て廻りくるが、我々にはもう一つの思ひ出にしか過ぎなくなつた。眠られぬ夜の爲に、うなされた惡夢が、夜明と共に打破られた形だ。しかし惡夢の夜の寢ざめは、意識も氣分も共にすぐれないものだが既に一年近くも恢復につとめてきた筈、もうそろそろ全快してもよい頃ではないか。

×

ところで何時か、今まで我々日本人の立つてゐた文化の面は極めて水準の低いものであつたし、女性のそれは一層甚しいと言つたら、ムキになつて、私は知識人です、少くとも文化人を以て任じてゐると云つてきたが、一體、口紅と、パーマネントと、スタイルブックを抱へて、お茶を飲み、映畫を語ることが文化人だと心得てゐるのかい。勿論、服裝、社交と一應は心要だが、それは飽くまで外面的な問題で、眞の文化人たるには內面的の教養が重要だ。教養の裏付けのない文化人とは、それは文化人といふ顏をしてゐる丈にすぎない。少くとも文化人、知識人といはれるには、先づ自覺と反省を持つて眞の自己を見出すべきで、思索と洞察とを以て、自分の思想といふものを徹底的に追究するところがなくてはならない。婦人に參政權を與へられた今日、明日の日本の明るい建設には、女性も共に起つてゆかねばならないのだ。行動の自由は自由ではない。眞の自由は高い文化の上に樹立し、そして我々は知性と良心とを以て、民主主義の發展に挺身しなければならぬ。このことはよく考へて貰ひたいものだと思ふ。怒らないでくれ給へ。

×

今月は又も合併號とした。發行日を追ひつくために止む得ず行つたもので、決して自分の怠慢からでないことを諒とせられよ。每號編輯には苦心してゐるのであるが、執筆者の都合等で豫期した企畫通りゆかず、すまなく思つてゐる。本號は御覽の通りの現代詩と隨筆の特輯だ。荒廢した心に、暖かい抒情精神を繰り展げてくれるものは詩だ。文月、葉月、空に敷く星、流れる白雲、紺碧の海と空、この美しい外見の自然を君の詩情は內的自然に調和させて美しい詩を生み出すであらう。それが藝術だ。深い思索を必要とする詩、詩こそ藝術のための藝術ではないか。暑い日盛り蟬は歌ひまくつて一生を終つてゆく、君も亦心ゆくまで歌ひ給へ。九月號は女性と文藝の特輯とし、八月末まで發刊するために頑張つてゐる。では今日これで失禮する。吳々も體を大切に、時々は又便りを賴む。（堀江）

定價 五 圓（送料十五錢）

昭和二十一年七月二十五日 印刷納本
昭和二十一年八月 一 日 發 行

編輯人 堀江義衞
發行人 波多野一
印刷人 小坂孟

東京都神田區神保町二ノ二
發行所 株式會社 巖松堂書店
振替口座—東京六五五六番
電話九段三三番——三三四番
會員番號A一〇七〇〇二號
東京都牛込區加賀町（東京一）
印刷所・大日本印刷株式會社
配給元・東京都神田區淡路町
日本出版配給株式會社

西鶴稀覯書飜刻（西鶴叢刊第一期）

後藤興善校訂並に解說

B六版百四十頁・和表紙美裝
各册定價十圓・書留送料二圓

（一）

好色盛衰記 全

本書は、西鶴四十七の歲の作。同年は町人物、好色物、合せて五部の書を著し、藝術的に圓熟し、且つ創作に膏ののりきつた年である。本書が金の文學と好色文學との兩面の面白さを兼ねた傑作といはれるのもむべなるかなである。原本は大阪府立圖書館に唯一本あるのみの稀覯書。

（二）

一世の物語
久二世の物語
椀久 全

前者は所謂椀久物文學の創始作にして、同時に西鶴の實說物に筆を染めた第一作、ヒーロー椀久を描いて性格躍如たるものあり、今日の文藝批評の尺度を以てしても驚くべき創作である。後者は男色の地獄めぐりの趣向になる好作。遊客の裏面をうがち描いてゐる點江戸後期の洒落本文學の先驅をなしてゐる。共に多面的作家西鶴の優秀性を示す傑作。

以下西鶴の稀覯浮世草子及び俳書の飜刻續刊。尙「西鶴叢刊」として、好色物・町人物の傑作の評釋書、現代語譯刊行の豫定着々進捗中。

東京都築地四・京橋の二
翠書房
電話一二三四・築地一七八五